Osaka University Knowledge Archive

Title	奥の細道ところどころ（二）
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1951, 2, p. 29-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68371
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

奥の細道とところどころ（二）

小島吉雄

三、漢字の読み方

俳人は歌人に比すれば好んで漢字で書き漢語を使ふ傾きがある。芭蕉もまたその例に洩れない。「奥の細道」にも相当数の漢字漢語がある。漢字漢語には、元來音訓さまざまな読み方があるから、読みの固定化には困難の伴ふことが多い。たとへば「詣」といふ字は「まうづ」と訓むか「けいす」と読むか、或はまた「記念」は「きねん」と音読するか「かたみ」と訓読するか、どちらに読んでもよいやうなものだが、作者自身がどちらに読まうとしたのか、またどちらに読んだ方が文としての表現効果があがるかといふことなどを考へると、問題はなかなかに難しく、軽卒に読み下せないことになつてくるのである。「奥の細道」で迷はされるのは、漢字の読み方である。

暫時は滝に籠るや夏の初め

といふ句に於て、「夏」は「なつ」とも「げ」とも「か」とも訓み得るが、この句の場合は、意味の上からも音律の上からも「げ」に治定してゐる。また、「暫時」も、ここでは音数律の上から必ず四音に訓読しなければならないから、「しばらく」とより外に訓み様がない。かういふ風にその訓みが一つに確定せしめ得る場合は、事は甚だ簡単なのであるが、同じ「暫時」でも、散文の場合、たとへば、「暫時千歳の記念とはなれり」といふ文章に於ては、「ざんじ」と音読すべきか、また訓読するとしても「しばらく」と訓ずべきか「しばし」と訓ずべきか、その判定の客観的基準を得がたいのであるから、事は容易に解決しがたいのである。すなはち、このやうに問題の生じたときは、われわれは、その個個の場合に應じて、その場合の諸條件を勘考してその読み方を決めてゆくより外に方法がない。そして、一番合理的だと思ふ読みをつとめて実証的方法で定めてゆかねばならぬ。

以下、素龍自筆本「奥の細道」の本文に從つて、問題になりさうな読みについて、再検討して見ようと思ふ。

さて、本文を冒頭から順次に見てゆくとまづ「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」の「漂泊」である。漂泊は「さすらひ」と訓読も出來るが、既に「片雲」は音で読むべきであるから、「漂泊」も音で読んでおく方がよろしからうと思ふ。といふのは、「片雲の風にさそはれ」と「漂泊の思ひやまず」とは対句的表現となつてをり作者は両句の語調を合はさうとしてゐるやうで、從つて「片雲」と「漂泊」とを音読して、音の上から言つても、どちらも「ハ行音」で韻律的であるやうにする方がよろしいからである。韻律的といふことは、「奥の細道」の文の大きな特色であつて、読み方の場合にも常にその韻律的効果を考慮に入れる必要があらうと思ふのである。その次の「海浜にさすらへ」から「蜘の古巣を拂ひて」までの各句の句頭が「カ行音」で初まつてゐる点なども注意すべきことである。

ところで、そのところの「去年の秋」の「去年」の読み方だが、これを「きよねん」

と読むか「こぞ」と読むか、わたくしはやはり「こぞ」と読むべきであらうと思ふのである。これなども、韻律的効果を考慮した読み方で、「去年の秋、江上の破屋に」の句に於て「こぞ」と読むと「江上」と頭韻を踏むことになるし、またこの前後の句がすべて五七、五四といふやうな一定の音数律を以て構成せられてゐて作者としても音数律的効果といふことに考慮を拂つてゐるらしいから、その音数律の上から言つても「こぞ」と読む方が、「きよねん」と読むよりも都合がよろしい。以下後出する「去年」は右と同理で、すべて「こぞ」と訓読すべきだと思ふ。

次に、「彌生も末の七日、あけぼのの空朧々として」の「朧々」を音訓いづれで読むべきかといふことであるが、これも「おぼろおぼろ」と読むと、字餘りになり「月は在明にて光をさまれるものから」の字餘り的語調と重なりあつて、ここの文章は非常に語呂の悪い、重々しい響きのものとなつて、韻律的効果を悪化する。だから「ろうろうとして」と七音に音読する方がよろしい。和漢朗詠集に「不明不暗朧々月」といふ句があるが、多分芭蕉はこの句を意識して作文してゐるのであらう。「朧々として」の句を「月は」で受けたところは、この詩の句を思ひ合はすことによつて一層その行文の妙を発揮することになる。その朗詠の詩句との感合といふ点から考へても、朧々は音読すべきである。

「幻のちまたに離別の泪をそそぐ」の「泪」は「なみだ」「なんだ」のどちらに読んでも差支へないが、音感からくる氣分に相違が生じる。松島の描写のところに、「美人の顔を粧ふ」といふ文があるが、この「顔」も「かほばせ」と「かんばせ」と両様に訓み得る。「氣色えうぜんとしてびじんの」と撥音の多い語句を受けてくるのだから、「かんばせ」と読んだ方が韻律的にはふさはしいかも知れない。なほ、ここのところを「かほ」と読むのには賛成出來ない。

総じて、語の傳統的読みは尊重せられなければならない。松島瑞岩寺のところに出てくる「金壁荘厳」は「こんぺきしやうごん」と読まねばならぬことは、誰しも知つてゐることであるが、「往昔」なども、もし音読するならば、「わうじやく」と呉音に読むべきである。もしまた訓読するならば、「そのかみ」と訓ずべきであらうが、「往昔」と「昔」とを「奥の細道」では書き分けてゐるのであるから、「往昔」をそのまま「むかし」と読ますことは出來ない。「往昔」を音訓いづれに読むべきかは倉卒には決めがたいことであるが、謡曲などにも呉音読みになつてゐるから、謡曲風に音読する方が妥当であらう。謡曲の読みは比較的に傳統を傳へてゐるし、芭蕉時代の文章を読むには謡曲の読み癖などは大いに参考にすべきだと思ふ。この時代の文学のあらゆる方面に謡曲は大きな影を投げてゐる。

それから、和文調のところでは、つとめて訓読した方がよろしく、漢語調のところでは音読もまた耳立たない。また、立石寺の條に「岩上の院々扉を閉て」とあるが、ここの「扉」はなほ「とびら」と読んで少しも支障を感じない。しかし、和文脈の場合は、たとへば、福井の等裁宅訪問の條に「鶏頭ははき木に戸ぼそをかくす」と仮名書きになつてゐるが如く、同じき訓読であつても、和文脈の場合にはそれにふさはしい心しらひが必要である。平泉の光堂の條の「金の柱、珠の扉」は「こがねの柱、珠のとぼそ」と読むべきであり、小松の太田神社の実盛の甲の「金をちりばめ」は「こがねをちりばめ」と読むべきだと思ふが、「金」を「こがね」と読むのは文の調子から來てをり、「こがね」の読みに照應させて、「とぼそ」の読みが生ずる。

なほ、このほか、音訓いづれに読むべき

かを確定しがたいものも尠くない。「紙子一衣は夜の防ぎ」の「一衣」とか、「千歳の記念」とかがそれである。「一衣」は「いちえ」と読んで一枚の義にとる人が多いやうであるが、杉浦正一郎氏は菊本氏の傳去來自筆本には「ひとへ」と仮名書きにしてゐるから、「一衣」も「ひとえ」と読むべきだらうと言つてをられる。「衣」を仮名と見るのである。わたくしの現在の知識では、どちらが正しいと言ひ切り得ないのであるが、「ひとえ」説も理に適つた説ではある。「千歳」も「せんざい」と読むか、「ちとせ」と読むかが問題であるが、日光の條の「千歳未來をさとり給ふにや」の場合は、「みらい」と韻をふむことになるから「せんざい」と読む方がよろしいやうである。しかし、武隈の松に「今將千歳のかたちととのほひて」と述べたところは、松のことだから「ちとせ」と読んでもよささうである。そのほか、壺の碑や平泉の光堂の條に「千歳の記念」といふのが出て來てこれらの場合は「せんざい」と読む方がその前後の强い漢文句調にふさはしい。元來芭蕉の所謂「千歳」は、特殊用法であつて單に「千年」といふ意味ではなく、「千年の昔」もしくは「千年前」といふやうな意味に使はれてゐる。さういふ特殊な語義を読法の上にまで反映するためには、音読の方がよろしいかも知れない。從つて、武隈の松の場合も音読しようといふのが、今のわたくしの考へである。次いで、「記念」の読みであるが、これも音訓両様に読めるわけだけれども、ただ象潟の條に「西行法師の記念をのこす」とあるところだけは、音読は好ましくない。「櫻の老木」を訓読した続きであり、比較的和文調のところでもあるから、ここは「かたみ」と訓読したい。もしこの一例を他の場合にも推し当てれば「記念」はすべて「かたみ」と読んで差支へない。

伊達の大木戸のところに、「路縦横にふんで伊達の大木戸を越す」といふ文がある。この「縦横」も音訓二様に読めるわけであるが、荻原井泉水氏らは音感の上から、ここは音読した方が芭蕉の心持がよく出ると説いてゐる。雲岩寺の條では、「たてよこ」と読む場合に特に「竪横」の字を宛ててゐるから、作者としては、「縦横」の場合はすべて音読せしめようといふ意図をもつてゐたのかも知れない。もちろん、それは、わたくしの一つの臆測ではあるが。

最後に、諸注釈書に於て、読みの一定せず、問題になつてゐるのをあげると、まづ第一に、那須の野越の條の「野越にかかりて直道を行かんとす」といふのがある。「野越」は「のごし」か「のごえ」か、両説があつて治定しない。「直道」についても色々と説があるが、これは、曾良の随行日記に「すくみち」と仮名書きで出てゐるから「すぐみち」と読むべきことは明白である。問題は「野越」の方であるが、わたくしの考へでは、「のごえ」の方がよいと思つてゐる。これが、もし「見る」とか「來る」とかいふ動作を示す語に連なるのであるなら、「のごし」と読んで差支へないが、ここでは「かかる」といふ用言に続いてゐるから、「のごし」ではをかしいと思ふのである。「野越し」「山越し」といふ場合は、向うと此方との間に野や山が隔てとなつてゐて、その野や山の向う側から此方側へ動作主が作用してくるのである。「野越え」「山越え」といふ場合は、その野や山の向う側へ此方から動作主が作用してゆくのである。「奈良坂越え」「山越しの風」「襖越しに話す」などといふ熟語を思ひ浮べてみると、その相違がよく分る。通路を意味する時は、すべて「越え」である。從つて、「野越しにかかる」では意味をなさないと思ふのであつて、「野越えにかかる」と読むべきだとする所以である。

なほ、どうしても読みのはつきり分らな

いものに、「閒に」の語がある。須賀川の栗斎のことをしるしたところにある副詞であるが、この「閒に」を通常は「そぞろに」と訓ませてゐる。ところが、字書には「閒」の字に「そぞろ」といふ訓はない。そこで勝峯晋風氏らは、これを「しづかに」と訓まうとしてゐる。「閒」は「閑」に通じるからである。しかし、素龍本では、「しづかに」と訓む場合には別に「閑」の字を宛ててゐる。しかも「しづか」と読む場合が二ヶ所あるが、二ヶ所とも「閑」の字を使つてゐる。ここも「しづかに」と読ましたいのならば、「閑」の字を書けばよいものを、特に「閒」の字を書いてゐる。わざわざ「閒」の字を宛てたのには、何か理由があるのではないか。或は、「閑」の字とは違つた訓みを意図してゐたのかも知れない。しからば、「閒」の字は、どう訓むのであるか。さうなつてくると、わたくしには分らないのである。従來の「そぞろに」といふ訓み方にも何らかの根拠があるのではないかとも思ふ。文意のうへから言へば、「そぞろに」といふ訓みは、まことによく当てはまるのである。杉浦正一郎氏が最近発見せられた曾良傳來本では、ここのところはどうなつてゐるであらうか。それを調査したならば、或は何らかの手がかりが得られるかも知れない。

四、送り仮名について

昔の文章は、現今のやうに丁寧に送り仮名を送らないのが、普通である。素龍本「奥の細道」でも、その送り仮名が十分でないために、読み方のあいまいな場合が非常に多い。たとへば、「詣」の字の訓み方である。那須の篠原の條に「それより八幡宮に詣」とあつて、送り仮名がない。かやうに「詣」に送り仮名のない場合は、このほかに「塩釜明神に詣」「瑞岩寺に詣」「権現に詣」「太田の神社に詣」などがある。これらの場合は現今普通には「詣づ」と訓じてゐるのであるが、ところが、室の八島の條には「室の八島に詣す」と送り仮名をしてゐる。また日光山のところでは「卯月朔日御山に詣拜す」とある。これらから類推すると、「八幡宮に詣」なども「詣す」と読むべきかも知れない。そこで、「詣づ」か「詣す」か、どちらに從ふべきかが一往問題になつてくるのである。尤も、この場合は、素龍本「奥の細道」全躰を調査することによつて、帰納的に「詣づ」と読む方が正しいことが分るのであるが、すなはち「詣す」の如く音読する場合には「逗留す」「開帳す」「安置す」「拜す」「礼す」「献ず」の如く、きまつて「す」の送り仮名を附してゐる。また訓読の場合には、たとへば、「山門に入」「短册得させよと乞」「短册に書」「風雪を凌」「雲に望」「百三十里と聞」「湊に出」の如く、終止形の送り仮名は省略するのを常としてゐる。松島の條には、「甫嶌」だけで「はらばふ」と読ませてゐる例もある。中には「市振の関に到る」「岩手の里に泊る」のやうに送り仮名を送つてゐる場合もあるけれども、これはむしろ例外的と認むべきであつて、原則的には送り仮名を附してゐない。これらの諸例から考へると、「詣」に送り仮名のない場合は訓読するのがよろしく、「す」の送り仮名のある場合だけ音読するを至当とする。仍つて、「詣」とのみ書かれてゐる場合は「詣づ」と読むべきである。

かういふ風に送り仮名がない場合、その読み方に迷ふことが生ずるのであるが、表記のしかたを帰納的に調査することによつて、その読みを定めることが出來る。けれども、帰納的方法を以てしても、その読みを定めがたい場合も尠くない。われわれが最も困るのは、「入て」「仍て」「病て」「踏

て」「物書て」等、音便に読み得る場合である。仮名書きの部分を調査しても、「わたりて」「見送りて」「いさごをふみて」「我々にむかひて」といふやうに記されてゐる場合が多くて、音便になつてゐるのは「わたつて」「水みなぎつて」「門人となつて」「とつて返し」等数例に過ぎないから、送り仮名のない場合もその大抵は音便に読む必要がなからうと思ふが、しかし、場所によつては、その前後の語調から音便に読んだ方がよいと思はれる場合があつて、さういふ場合は音便に読んで差支へない。いづれにしても、かういふ場合の読みの容観的基準は見出だしがたいのである。

出発にあたつての句に「行春や鳥啼魚の目は泪」といふのがある。この場合、「鳥啼」は「鳥啼き」と読むべきは自明のことであるが、この表記例にならつて、飯坂温泉の條の「雷鳴雨しきりに降て」の「雷鳴」も「雷鳴り」と読むべきだと思ふ。中止形の場合に、送り仮名を省略するのも、素龍本では通則のやうになつてゐる。

また、副詞の場合「に」の助辞を省略することが屢〻である。「殊に」「既に」「誠に」「更に」とあるべきところを、すべて「に」を書かない。かういふ場合は「に」が書かれてゐなくても、「に」を読み添へるべきである。「必ず」といふ時も「必」の字だけで「ず」の字を送らない。但し、「遥」の場合は例外であつて、「遥に」と読まうとするときには「に」を送つてゐる。「に」を送つてゐない場合は「はるかに」と読むのではなくて、「はるか」と読むのである。

送り仮名がなくても、語の前後の続き方からその読み方がおのづから一定してくる場合、たとへば、「出立侍を」「たどり着けり」のやうな類ひは、もとより問題はないのであるが、那須野越えのところにある「あたひを鞍つぼに結付て」といふ句の「結付て」の如きは、「結び付けて」と読むべきか、はたまた「結ひつけて」と読むべきか、両様に読み得るので、甚だ困るのである。かういふ場合は送り仮名を缺いたがために、その読みに安定性がなくなつたわけである。わたくしは、ただ自分の好みに従つて「結びつけて」と読んでゐる。

素龍本では、「思ひやまず」「思ひたちて」「思ひかけず」等には、きまつて「思ひ」と書いてゐる。かういふ例を幾つか取りあげそれらと送り仮名を省略してゐる場合とを併せ考へてゆくと、筆者は或る一定の方針のもとに送り仮名をつけたり省略したりしてゐるやうで、全然の無方針のでたらめといふわけではなささうである。

五、句読点について

昔の文章には普通は句読点といふものがない。素龍本「奥の細道」にも句読点がつけられてゐない。ところが、この句読点のつけ方如何によつて文章の意味の変つてくることが、屢〻ある。前回に申し述べた「春立てる霞の空に白川の関越えんと」といふ文章などは、その一例であるが、日光の裏見の滝の條、

二十餘町山を登つて滝あり

といふのなども、読点のつけ方によつて、意味がちがつてくる。すなはち、「二十餘町」の下に読点をおくかおかぬかによつて意味が違ふのであつて、もしそこに読点をおくと、飯野哲二氏の説のやうに、「二十餘町行つて、それから山を登ると滝がある」といふ風に解することが出來る。しかし、二十餘町の下に読点をおかぬと、「山を二十餘町登ると滝がある」といふ意味にとれる。どちらに読む方がよろしいかが問題であるが、ただ単に語法的に言へば、どちらにとつても間違つてゐない。けれども、事実の上から言へば、二十餘町行つてそれから山を登るのでは地理的に間違つてゐる。芭蕉はこの日、日光鉢石町の宿を出て一路

裏見の滝に向かつたのであるが、鉱石町から裏見の滝への山道の分れ道のところまで実に一里餘あるのであつて、山道に分け入つてから裏見の滝までの距離が二十餘町なのである。だから、ここは、読点をつけない方がよろしいといふことになる。

これなどは、地理的事実の上から、句読点を定めた一例である。同様の例は、影沼の條にもある。

左に会津根高く、右に岩城相馬三春の庄常陸下野の地をさかひて山つらなる影沼といふ所を行くに今日は空曇りて物影うつらず

といふ文章であるが、「三春の庄」と「常陸」との間に読点を置くと、「右に」は「三春の庄」にまでかかることになり、もし読点をおかなければ、「右に」は「常陸下野の地」以下にまでかかつてゆくことになつて文意は大変違つたものになる。また「山つらなる」の下に句点を施すか施さないかによつて、これまた大変な相違が生ずるのでもし句点がなければ、「山つらなる影沼」と続き得るのである。原本には「つらなる」が仮名書きになつてゐるから、かういふ問題も起り得るのであるが、「右に」が「常陸下野の地」にまでかかつて行くものとすれば、実際の地勢と相違してくるから、ここはどう考へても、「右に」は「三春の庄」にまでしかかからない、従つて「三春の庄」の下に読点を施さねばならぬことになる。また「山つらなる」も、影沼が山面にあるならば兎も角、実際は野中にあるのだから「山面なる影沼」といふことは地理的に間違つてゐる。それに、「山つらなる」を影沼の修飾語だとすると、「さかひて」の主語が「岩城相馬三春の庄」でなければならぬ。さうなると、これもまた事実に違つてゐる。かういふわけで、「山つらなる」は「山連なる」であり、「つらなる」の下に句点を施して、文がここで切れることにしなければならぬ。このことは、曾て荻原井泉水氏もくはしく述べられたことであるが、つまり句読点の施し方が非常に大切だといふ好例である。われわれが「奥の細道」を教授する際などには、かういふ点をも学生によく注意させて、文を読むための推理力を養成する一助ともし、また作文にあたつて句読点に注意を拂ふことの必要さを自覚させる契機ともしたい。

なほ、昔の写本には普通は濁点を附してゐないものである。この素龍本「奥の細道」にもやはり濁点をつけてゐない。それで、これを読む時には、われわれ読者側で濁点を補つて読まねばならない。「奥の細道」の場合には、清濁に迷ふことは殆どないやうだから、それについては、ここに詳説しないことにするが、古典類には、清濁に迷ふ場合も甚だ多く出てくるのであつて、それがまた一と苦労である。

古來、清濁を附し句読点を施して文を読むといふことが、その文を半ば解釈したことになるといふので、この読法といふものを非常に重んじたものである。殊に、中世の秘傳ばやりの時代には、古今集や源氏物語の読み方にも傳受があつて、これを非常に重要視してをる。三條西実隆の実隆公記などを見ると、宗祇法師が專らこの読法のみを実隆や牡丹花肖柏に講じたことが屢出てゐる。古典の場合に於ては、正しく濁点を施し句読点を附するだけで既にこれを半ば解釈し得たことになるのである。今回、煩をいとはず、「奥の細道」の読みの問題をとりあげて縷説したのは、この謂ひにほかならぬ。